

# 断章 旭川のアイヌ語地名研究

68

高橋 基

旭川のカムイコタンのニツネカムイ伝説は、掲載図には収まらず、掲載図④の「ニツネカムイネト・パケ(nitneka muv-netopake 鬼神の・躰)」から、約一・五キリ上流の左岸の**写真(1)**のトゥレプサラニア(turep-saranip オオウバユリの球根・ーを入れたー手さげ籠)と言われた伝説の大岩まで続くのである。

安政四年(一八五七年)にこの大岩を見た松浦武四郎は、これはニツネカムイが落命する時に捨てたサラニア(手さげ籠)で、それが岩と化したものと聞き、「再篙石狩日誌」に次のように伝説を書きとどめた。

「トレツフサラ子フー大岩一ツ右(註・上流に向かって右)左岸の川岸に突出す。トレフは則、蕎麦葉貝母、松前方言ウバユリと云。京都辺の山にてはガワユリ、また一名鹿かくれ百合と云もの也。夷言(註・アイヌ語)是をトレ

フと云、山中の婆爺、喰料に大抵是を当るもの也。むかし其トレフをサラ子フと云ものに入れて、此処までニイツイカモイ持ち来り、此処にて命終りて捨てたるが、石に化せしと云処也。サラ子フは次に凶する如し(写真②)。アイヌ等山に行く、または川に行く時、喰料其外の具等を入れて持ち行くもの也。本邦にてコダシ(註・小出し)・フゴ(註・奮)等云もの也。楡皮(註・楡の木皮で作った糸)にて編みて用ゆ。」

**写真(1)**の大岩は、武四郎が描いた**写真(2)**のサラ子フ(手さげ籠)に似ていて、実はこれはニイツイカモイ(ekamuy 鬼神)が、捨てたものが、石と化したものだろう。

## 旭川のカムイコタン 25

上で、貴重な記録となっている。「トレフサラ子フと云は、彼鬼神の携へ居たりし蕎麦葉貝母(トレフ)ー和名鹿かくれ百合といふーを入れし籬(サラ子フ)の化石なりと。惣て此鬼神には種類の縁故も有りしが、アイヌ等他に語ることを禁せりとかや。」

さて、昭和六年発行の近江正一著伝説の旭川及其附近でも、同じ伝説が簡潔に記述されているので、最後の部分のみ記載する。

「…そしてニチエネカムイの首は岩となり、ニチエネシヤパ(鬼の首)となり、胴体は立岩ニチエネとなり、持っていたフゴ(籠)は化石となつてトレツプとれるのだという。」

サルネツプとなつた。ドレツプはうば百合、サルネツプはフゴの意である。「ところが、昭和三十年に、砂沢クラさんの母の川村ムイサシマツ姥伝として、この大岩は、ニツネカムイではなく、サマイクルカムイの忘れた籠という伝承が、更科源蔵により次のよう紹介された(『北海道伝説集・アイヌ篇』文章は「アイヌ伝説集」によった)。

「サマイクルカムイの漁をする小舎が、今も伊能(註・伊納)の駅の近くに岩になつている。それから姥百合を入れた籠は、魔神のものではなく、サマイクルカムイのもので、その籠を忘れて行ったので、附近には今も姥百合が沢山とれるのだという。」

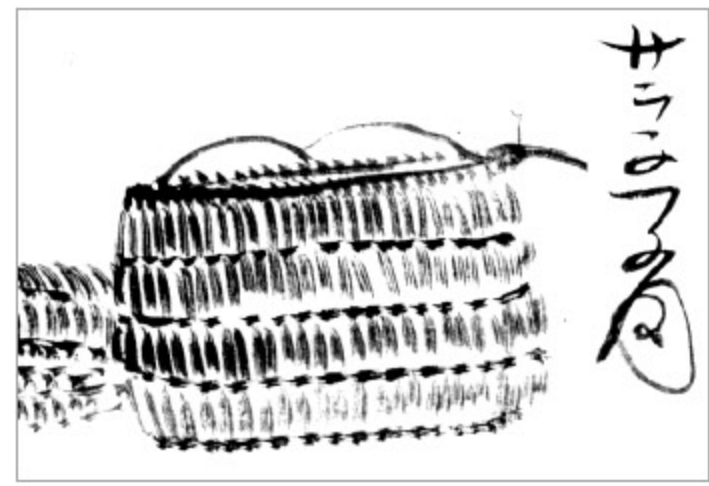
伝承者によって、伝説も変わるといふ典型の一つである。同じように、昭和三十五年に、知里貞志保も、伝承者は明記していないが、**写真(1)**の大岩は、サマイクルの手さげ籠として、次のように地名解を書いている。

「サマイクル・トゥレフ・タ・サラニア(samaykur-turep-ta-saranip サマイクルがウバユリを掘った・手さげ籠)ーこれも岩と化して今も岸に近い河中に立っている。」

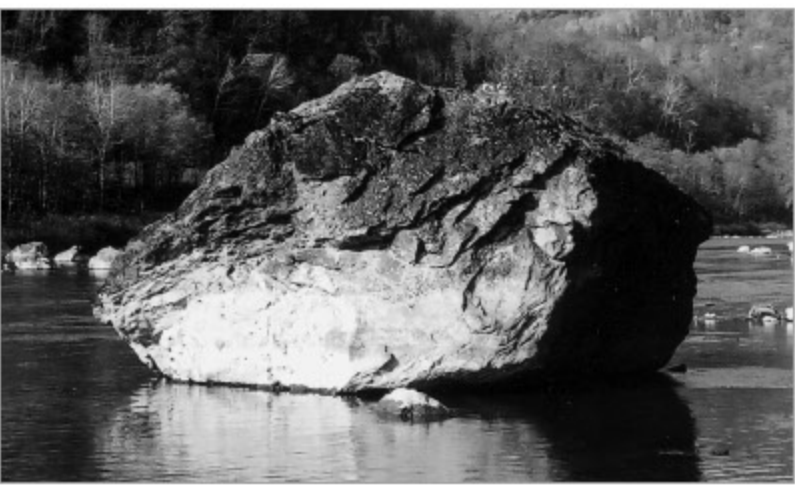
**写真(1)**のトゥレフサラニアの大岩の位置は、別項の掲載図で明示したい。

(アイヌ語地名研究会幹事)

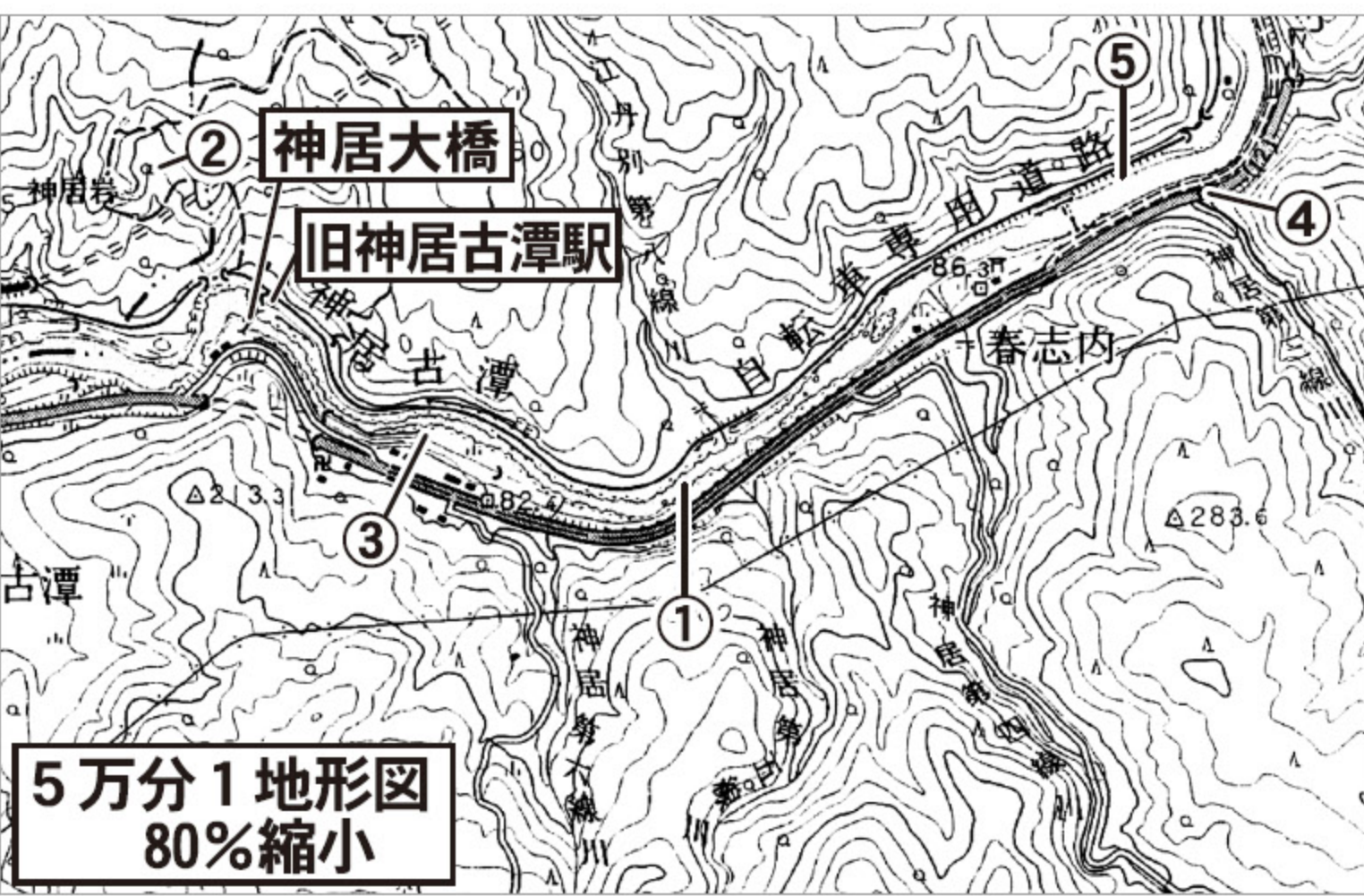
※毎月第一週号に掲載します



(2)「サラ子フの図」



(1)トウレプサラニア



5万分1地形図 80%縮小